

# 千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器 「焼町土器」、および北関東地域との関係を中心に

Study of Pottery from the Middle Stage of the Middle Jomon Period in  
Area of Chikuma River Basin

寺内隆夫

はじめに

①千曲川流域の中期中葉土器の時期区分とその特徴

②千曲川流域各地の土器様相

③「焼町土器」ベルト地帯と地域間交流

おわりに

## 【論文要旨】

本稿は、北関東地域の縄文時代中期中葉土器の生産と流通を考えるにあたり、西側に隣接する長野県・千曲川流域の資料を軸とし、型式論による土器の比較検討を試みたものである。

分析の前提として、北関東地域と地理的に接する千曲川流域の時期区分を行い、在地土器の基本的な装飾を明らかにした。時期区分は東信地域の資料を基準にⅠ～Ⅴ期を設定した。在地土器を代表する装飾には、隆線による各種懸垂文（Ⅰ期）と、その発展形態の「曲隆線文」（Ⅱ期以降）がある。さらに、千曲川流域の代表的な遺跡を例に、在地土器と他地域の土器のあり方について概要を記した。Ⅰ・Ⅱ期では、阿玉台式土器などの関東地域の土器の搬入や影響が顕著であり、Ⅲ期以降では中部高地南半地域の勝坂式土器の影響が他を圧倒する。また、北信地域では越後地域との関連が強く認められた。Ⅲ期以降、東信地域では「焼町土器」が主体となり、北信地域では越後系の土器が中心を占めていた。

次に、千曲川流域の土器様相を明らかにした上で、北関東地域との対比を試みた。まず、「曲隆線文」を有する「焼町土器」（Ⅲ・Ⅳ期）を分析対象とした。その分布は、中部高地内陸部を中心に東西方向に広がっており、千曲川流域を上下する流通経路のほかに、峠越え・尾根筋ルートによる東西交易も盛んであったことを裏付けた。分布域内東部の群馬県域と分布の中心に位置する東信地域の資料を比較すると、器形・個別装飾・施文手法などのレベルで異なった特徴を持つ土器の存在が判明した。このことは、搬入品以外に、群馬県域内で製作された「焼町土器」が存在していた可能性を示している。

このように、北関東地域は長野県内では東信地域との結びつきが特に強く、土器の搬出・搬入関係が認められた。さらに、「焼町土器」がそれぞれの地域で製作されていた可能性が高いことから、情報の交換や人の移動なども盛んに行われていたと考えられる。

## はじめに

北関東地域における縄文時代中期中葉土器の生産と流通について考えるにあたって、西側に隣接する長野県地域の土器群とはどのような関係にあるのか。このことを、型式論的な手法によって明らかにしてゆくのが、筆者に与えられた課題である。特にこの中間報告では、長野県御代田町・川原田遺跡出土資料を中心に胎土分析結果が提示されている。その成果と型式論的な成果を対比させるため、川原田遺跡の主体的な土器である「焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例」(野村1984)(以下「焼町土器」と略す)を中心に検討を進めることとする。ただし、北関東地域と接する千曲川流域の中期中葉の土器については、これまでまとまった論考が発表されてこなかった。そこで本稿では、まず当該地域の時期区分と流域内での様相の違いを概述する。その上で、在地土器の特徴と系譜を明らかにしてゆく。また、この地域に搬入・あるいは影響を与えた異系統土器の事例を提示する。その上で、北関東西部地域にも広く分布している「焼町土器」について、千曲川流域との差異を明らかにしてゆきたい。

## ①……………千曲川流域の中期中葉土器の時期区分とその特徴

### a. 対象とする時期について

#### 中期中葉

筆者に与えられた範囲は第2章小林論文に示された1期・2期である。しかし、長野県側(千曲川流域に限定)の土器変遷と画期について説明するには、これより若干古い段階を含めて扱った方が理解しやすいと考えられる。そのため、ここでは、中期中葉全般の土器を対象とする。筆者の言う中葉とは、勝坂Ⅰ～Ⅴ式(下総考古学研究会1985)に併行する時期をさしている(第1部 小林論文「長野県から群馬県にかけての地域の縄紋中期中葉土器の編年研究」第1・2表編年対照表P 33参照)。

千曲川流域の土器装飾について見ると、中葉直前から中葉への変化は、関東～中部高地南部地域と連動している。すなわち、伝統的な装飾が衰退して一端無文化が進む時期(中葉直前)を経た後、隆線系装飾が発達し体部装飾の加飾化がはじまる流れである(寺内1988)。この新たな装飾の開始時期をもって中葉ととらえている。この傾向は中葉を通して発展・変容・衰退の道をたどる。千曲川流域では、体部懸垂文<sup>(1)</sup>の変化した「曲隆線文」が隆線系装飾による加飾化を担うこととなる。その他の個別装飾などが独自の変化速度を示す中、曲隆線文はほぼ全時期を通じて土器装飾の軸となる。その最も発達した段階が「焼町土器」の最盛期である(寺内1997)。曲隆線文の衰退期は、西関東から中部高地南部を主要な分布圏とする勝坂式土器に席卷されることで訪れる。そして、千曲川流域における土器様相に大きな変化が生じる。この衰退期までを中葉とした。

### 「焼町土器」の名称、および型式と期の関係について

現在、千曲川流域で主体になると考えられる中期中葉の土器は、仮称後沖式（寺内 1996）→「焼町土器古段階」→「焼町土器最盛期」→「焼町土器衰退期」（寺内 1997）の変遷を辿る。しかし、公表された発掘資料が少ないこともあって、型式設定を目的とした分析は仮称後沖式（以後、仮称を略す）以外進んでいない。

そのため、ここで使用する「焼町土器」の名称は、型式や類型などと同等の、明確に定義付けられた分類名称ではない。これまでの拙稿においても再三明記して来たとおり、あくまで「焼町遺跡1号住居址出土土器とその類例」（野村 1984）の略称である。よって、「焼町土器」とは「類例」の集合でしかない。それは野村一寿氏がⅠ類、Ⅱ類としたもの、および系譜がたどれるとした直前の土器群が中心となる。近年、「焼町式」と表記する例も見受けられる（堤 1997）が、型式設定のための詳細な分析結果を発表した論考は提出されていない。ただし、筆者としては、資料の公表が進みつつある滝遺跡、明神原遺跡、大仁反遺跡（いずれも長野県長門町）、それに既報告である川原田遺跡や寄山遺跡群（佐久市）など、第三者の検証が可能な遺跡が増加してきたのを機に、型式設定をおこなう所存である。

こうした現状を踏まえて、ここでは「型式」概念による段階区分ではなく、「期」を用いて説明を行う。ここでいう「期」は、使用時から廃棄時における「緩やかな同時性」を前提として使用する。例えば、ある出土事例がほぼ同時廃棄と推定された場合、形式的に見れば若干の時期差が想定される土器が含まれていても、とりあえず同じ「期」として扱ってゆく。「型式」区分であれば、そのズレを補正する必要があるが、現段階では補正のための分析資料が少なく、名称も定まっていないため、この状態で提示する。ただし、編年研究の進んだ阿玉台式や勝坂式の成果に照らし、明らかに混在と認められる例は除外した。

こうした前提を確認した上で、千曲川流域の土器を基軸として中期中葉をⅠ～Ⅴ期に区分する。

### b. 対象とする地域について（第1図）

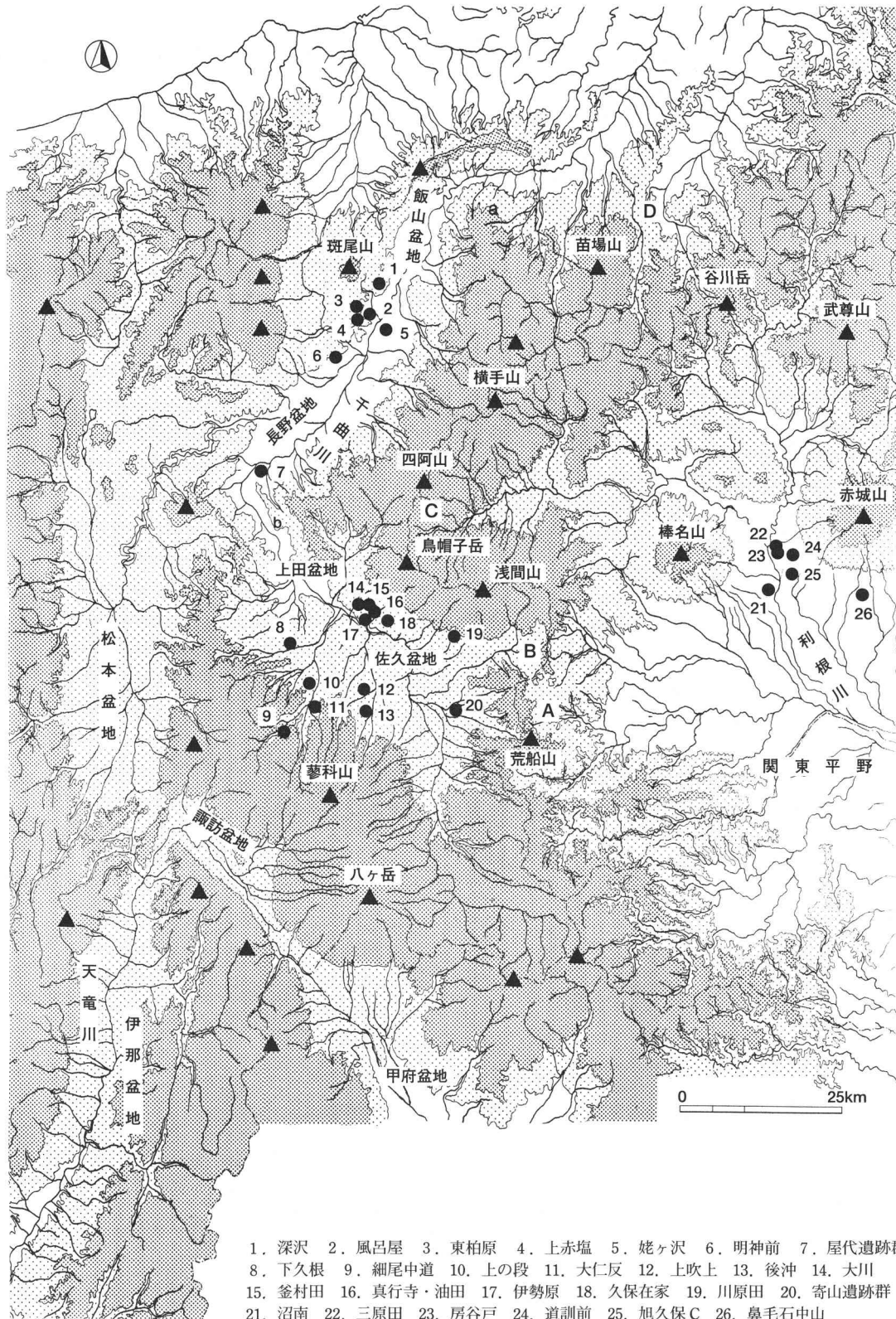
#### 千曲川流域

長野県域のうち、北関東地域と接する部分は千曲川流域に限定され、群馬県域の西側から北西側を包み込むような位置関係にある。県境は2000 m前後の山々によって隔てられており、縄文時代において土器装飾の差異を生んだ一因と考えられる。しかし、長野県産黒曜石の分布や後に述べる「焼町土器」の分布を見る限り、峠越えや尾根筋ルートでの交流が盛んであったことも事実であろう。本稿では、地理的に北関東地域と近接し、他の長野県内諸地域よりも濃密な関係が予想される千曲川流域の土器群に的を絞ってゆくこととする。

#### 北信地域と東信地域

千曲川流域（信濃川と呼ばれる新潟県域を除く）は、流路方向が大きく変化し川幅が狭くなる第1図・屋代遺跡群（7）南西付近（図中b付近）を境に二つの地域に分けられる。これより上流域は上田盆地・佐久盆地を中心とした東信地域であり、中・下流域は長野盆地・飯山盆地を中心とした北信地域である。

縄文時代中期中葉においては、上流域と中流域の境が交通に不向きな狭小な地形であること、



第1図 対象地域と掲載土器出土遺跡の位置

あるいは各々異なった隣接地域からの影響を受けやすいこと、などの地理的・文化的な要因によって土器装飾に差異が生じている。東信地域は、東側に分布の中心を持つ阿玉台式土器や南西側の勝坂式土器からの影響を受けやすく、一方、北信地域は越後系の土器群（高橋 1992）との繋がりが濃厚である。

本稿では、資料が比較的豊富で、群馬県域との比較が可能な東信地域の土器を中心とし、北信地域を補足的に扱うこととする。

#### 北関東地域へのルート

中期中葉には、狭小な谷奥まで集落が展開しており、そうした集落を経由し、峠や尾根筋に達するルートが確立されていたと推定される<sup>(3)</sup>。東信地域から北関東地域へのルートとしては、第1図Aの内山峠周辺、Bの碓氷峠周辺、Cの鳥居峠周辺ルートが重要であったと推測される。これに、各集落付近から尾根筋や獵場でもある高原地帯へ抜ける道が加わっていたと見られる。

東信地域に比べ、北信地域からのルートは山が深くなる地形的な制約がある。現在の志賀一草津ルートや秋山郷を抜けるルートも考えられるが、資料が少なく両地域の関係を土器の比較によって検証することができない。これに対して、土器装飾要素に見られる共通性からは、Dとした新潟県魚沼地域を経由したルートが重要であったと考えられる。

こうしたルートの違いが、土器装飾の微妙な差に影響を与えていたと考えられ、より北関東地域に近い東信地域の土器を検討の中心に据える理由の一つでもある。

### c. 縄文中期中葉のV期区分

#### 層位事例と伴出事例

「期」の区分は、千曲川流域の発掘調査において層位や竪穴建物跡の重複によって前後関係が把握できる資料のうち、比較的多くの土器を出土した例をベースとした。これに、既に編年の大枠が固まっている勝坂式土器や阿玉台式土器との伴出事例を加味して、V期区分を行った。前述のとおり、東信地域の在来土器を中心とした段階区分である。

#### 各期の特徴

第2図～第8図を参考に、各期の特徴とともに概略を述べる。

**I期** 五領ヶ台式最終末に併行する土器とI期との前後関係は、後沖遺跡19号住居址（第5図1・2）→20・30住居址（6・5）の重複例を基準とした。本地域では、この段階から隆線の発達が加速する。口頸部の幅狭区画文、体部の「R」「h」「p」字状、あるいはその反転形の懸垂文（第3図）が特徴である。区画内は斜行する集合沈線文によって充填される場合が多い。後沖式土器の典型例である。これに、勝坂I（猪沢）式土器や阿玉台I式土器が伴う。上の段遺跡例（第5図7～11）のように、後沖式土器の後半段階には勝坂II（新道）式土器（10）が伴う。

北信地域では、後沖式土器に類似した土器が増える一方、前時期に発達した継手（懸垂）文や半隆起線（平行沈線）が、変化しながらも継承される傾向が強い（第4図）。

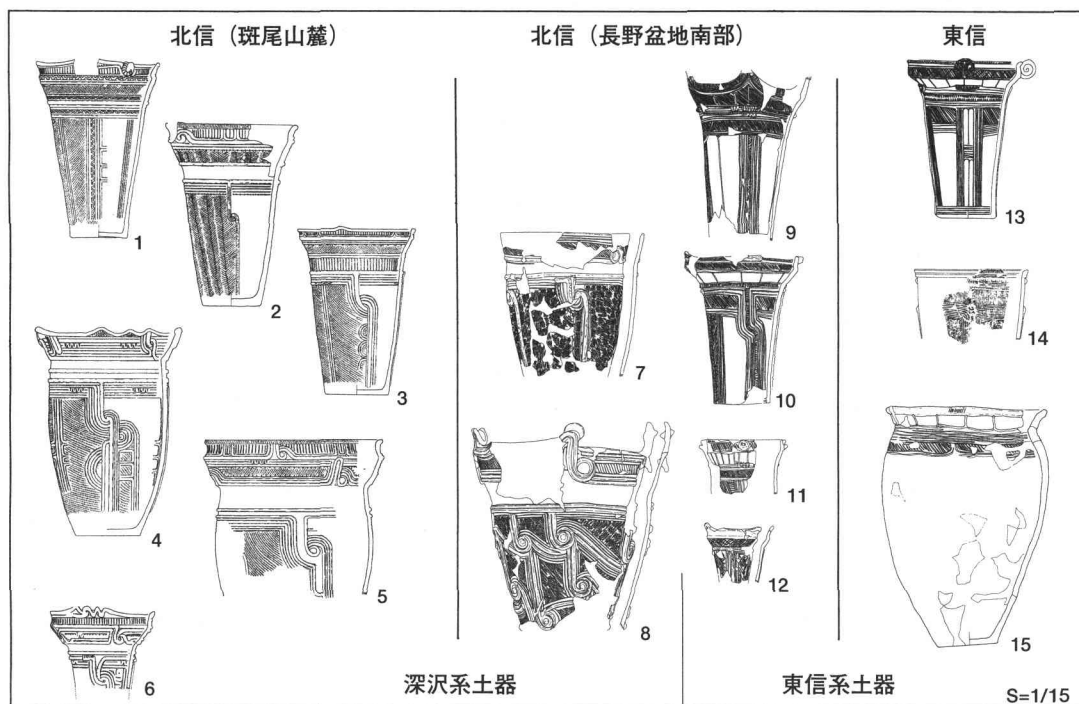
**II期** I期との層位資料は現在確認されていない。伴出する勝坂式土器の時期差を根拠にI期と分離する。久保在家遺跡18号住居址（第6図4～19）や川原田遺跡（第7図1～22）な

どで、勝坂Ⅱ（新道）式からⅢ式土器の古い段階（ほぼ藤内Ⅰ式）、阿玉台Ⅱ式土器が伴う。勝坂Ⅲ（ほぼ藤内）式土器を伴うⅢ期との重複関係には、大仁反遺跡4 g号住居址（第5図12～19・22）→4 e号住居址（20・23・24・26・27）、川原田遺跡J25住居址（第7図5・12・18）→J11号住居址（14・30・31・33・35）の例が認められる。

在地の土器（「焼町土器古段階」）では、後沖式土器の規範を継承した土器が若干残存する（第8図10）。しかし多くの土器では、その特徴であった幅狭区画文は衰退し崩れはじめる。三角形区画に類似した蛇行隆線が幅広の口縁部文様帯（第6図6ほか）に配される事例は、勝坂式土器に近似している。体部の懸垂文は横方向や斜方向に流れ、蛇行する傾向が強まる。舌状隆線が流行する時期でもある。隆線の脇には棒状工具か半截竹管のセを利用した単沈線が複列沿い、一部で縄文施文が復活する。北信地域では、東信地域と同様な変遷をたどる土器がある一方、越後地域と類似した土器も存在する。

Ⅲ期 大仁反遺跡4 e号住居址や川原田遺跡J11号住居址例などに見られる勝坂Ⅲ（藤内）式を中心とした土器との伴出例から設定した。Ⅳ期との層位事例は存在していない。阿玉台式土器の千曲川流域への流入がほとんど途絶える時期である。Ⅲ期とした中でも、加飾量の粗から密へ、あるいは幅広で施文の浅い単沈線から鋭く深い単沈線への変化が認められ、2段階に分離できる可能性が高い。しかし現状では、型式分析以外の方法によって前後関係を検証できる資料がないため、Ⅲ期としてまとめた。

「焼町土器」の基本的な装飾では、縄文施文が再びなくなり、継ぎ手文や「h」字状などの懸垂文が複雑化し発達する（曲隆線）。曲隆線の脇には複列の単沈線が沿い、それ以外の空



1～6. 深沢（飯山市） 7～12. 尾代遺跡群（更埴市） 13. 上吹上（望月町） 14. 細尾中道（和田村） 15. 下久根（丸子町）

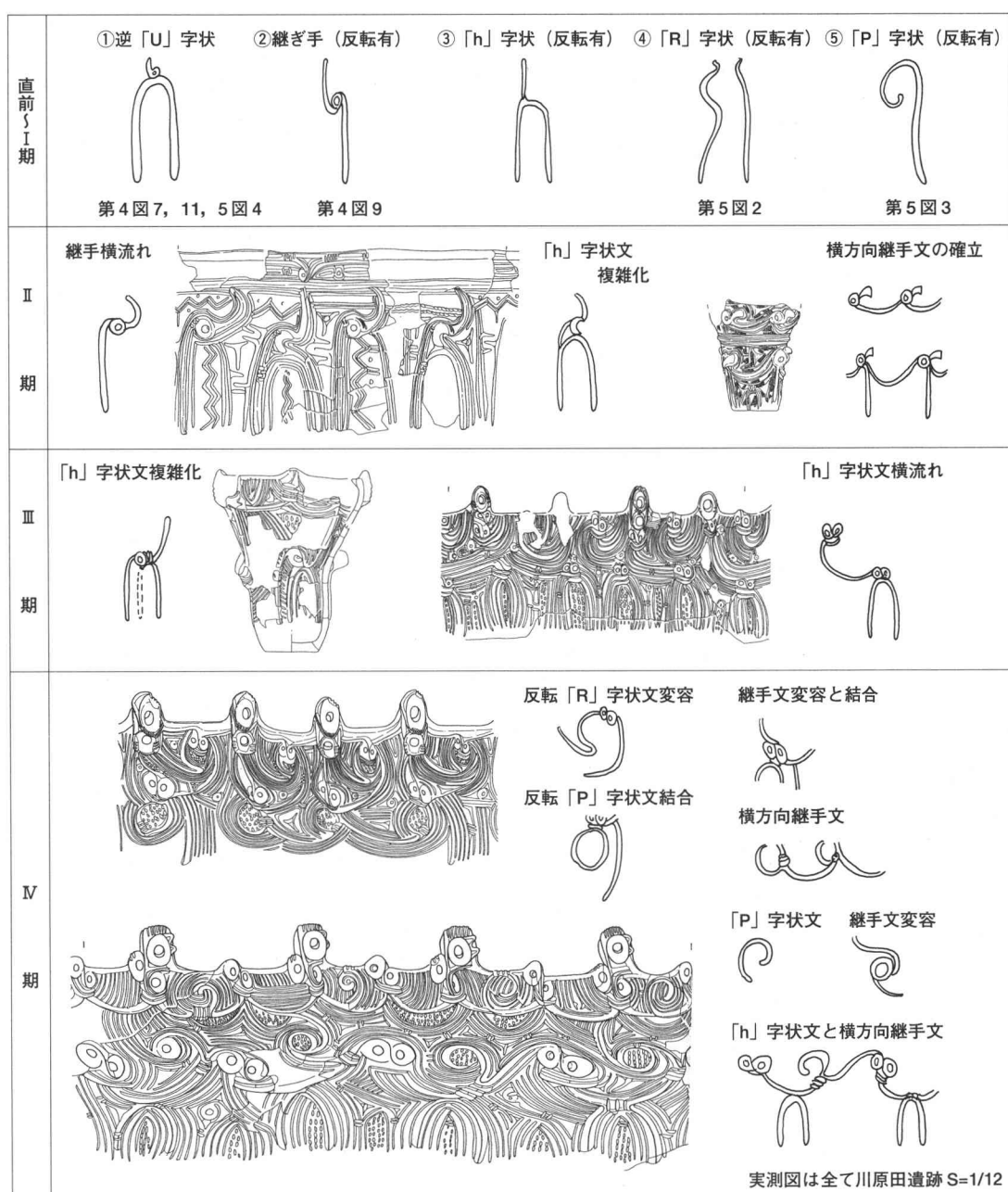
第2図 五領ヶ台Ⅱ式併行期・千曲川流域における2系統の土器

間は斜行沈線や刺突文によって執拗に充填されるようになる。

一方、北信地域では資料が少なく明確にはできないが、「焼町土器」と異なった越後系の土器群が主体となるようである（第4図）。

Ⅳ期 Ⅴ期の竪穴建物跡との重複事例には小諸市・郷戸遺跡 18号住居址→19号住居址の例（長野県埋蔵文化財センター 2000）がある。「焼町土器」が最盛期を迎える時期で、勝坂Ⅳ（ほぼ井戸尻式の前半段階）式土器を伴う。関東地域の土器の搬入は単発で、量的にも少ない。

「焼町土器」は、突起・把手・隆線装飾をさらに発達させる。曲隆線は複雑化し祖形が解



第3図 千曲川流域・中期中葉懸垂文の成立と変容



らないほどに変化する。その一方で、横位に器面を分割することによって多段化する傾向が生じる（第7図41ほか）。また、隆線に沿う沈線が増加し、施文が深く鋭くなる。単沈線のみであった沈線施文技法に、半截竹管のハラを利用して半隆起線（平行沈線）を描いた後、沈線部を再度深くなぞる技法が加わる。

北信地域は、資料が少なく不明な点が多いが、Ⅲ期同様、越後地域との関係が強いようである。

**V期** 在地製作と考えられる勝坂V（井戸尻Ⅲ）式土器が組成の主体となる段階をV期とした。後葉Ⅰ期の竪穴建物跡との重複事例には、郷戸遺跡12号住居址→15号住居址の例が存在する。Ⅳ期まで組成の中心であった「焼町土器」は急激に衰退する。わずかに、曲隆線の系譜を引く第7図51（川原田遺跡）のような小形の土器が見られる。51は曲隆線の基本形を踏襲しているが、隆線に沿う沈線は半隆起線となる。縄文が復活し、鋸歯状の口唇部やその直下の横位沈線など、「焼町土器」以外から採用される装飾が増加する。こうしたタイプの土器は、中期後葉Ⅰ期の資料と伴出する場合もある。「焼町土器」の部分的な装飾要素や技法は、在地の勝坂式や新たに流入してくる北陸～越後系譜の土器に部分的に引き継がれてゆく。

#### d. 各期および「焼町土器」の年代資料について

以上、竪穴建物跡の重複関係と伴出する勝坂式土器・阿玉台式土器の編年観を基準とし、千曲川流域の土器を大きく5期に区分した。本稿では、この時期区分によって、関東地域の土器と在地土器との関係を見てゆくこととする。一方、異なった方法によって並行関係や、さらには暦年代を導き出す試みがなされている。土器付着の炭素を材料とした<sup>14</sup>C年代測定である。現在、「焼町土器」やそれに伴出した勝坂式土器について、一部測定値が公表されている（前掲小林・今村・坂本論文「焼町土器の炭素14年代と暦年校正」P 37～55）。

ここで若干の紙数を借り、東信地域の川原田遺跡の測定資料について、型式論的な立場からのコメントをしておこう（測定値については前掲小林論文（P 37～55）を参照していただきたい）。

J 4号住居址は、埋土中からⅢ・Ⅳ期の土器が出土している。試料REK 5（J4住－33）は、隆線脇の鋭い単沈線、隆線接合部の沈線に刻まれた突出部の存在から「焼町土器」と見てよく、（Ⅲ）～Ⅳ期に属する。ただし、勝坂式土器の意匠から採用した三角形区画文以外に装飾が乏しく、細別時期を限定することが難しい。試料REK 6（J 4住－34）は、「焼町土器」の口縁部大突起と大突起の間に配される小突起部分であろう。時期はⅣ期である。試料REK 8（J50住－25）は、隆線装飾が認められないが、地文を縄文に持ち浅い幅広の単沈線が垂下する。Ⅱ期の在地土器と見られる。試料REK10（D83土坑－192）は、Ⅱ期あるいはⅢ期前半に位置付けられる勝坂式土器である。体部が細くしまり体部下半の楕円形区画文部分が突出する形態は、群馬県域を中心として千曲川流域でも少数認められる。

このように、現在「焼町土器」に関する年代測定資料は少なく、形式的な観点から細別時期を確定することが難しい破片資料がほとんどである。こうした点を補完するため、長野県埋蔵文化財センターが整理作業を行っている茅野市・長峯遺跡出土の「焼町土器」や勝坂式土器について<sup>14</sup>C年代の測定を開始している。その結果によって、関東地域と中部高地地域の土器群の位置づけが、型



式分析と<sup>14</sup>C年代測定の両方面から検証されることになるだろう。

### e. 中期中葉土器の成立と基本形

さて、話を本筋に戻すこととする。ここでは、ⅠからⅤ期を通して東信地域（千曲川上流域）の在地土器に特徴的な装飾について抽出しておく。これを基準として、北関東地域の土器を見てゆくためである。ただし、全ての装飾について触れることはできないので、特に、在地土器装飾の基軸となる隆線装飾を中心に挙げる。

#### 中葉直前段階の地域性

まず、在地特有の中葉装飾が成立する前段階の様相について触れておく。第2図に示した土器は、五領ヶ台Ⅱ式併行期の千曲川流域を代表する例である。もちろん、通常これに五領ヶ台式土器などが加わって組成をなしている。東信地域の土器で注目しておきたいのは、幅狭の口頸部文様帯と多用される斜行沈線文である。体部隆線の使用頻度はひじょうに低い。これに対し、北信地域の土器は、隆線による継手文と呼ばれる懸垂文が発達し、隆線脇には複列の半隆起線（平行沈線）が沿う。これらの伝統的な装飾要素は、その後も継承され、断続的に盛行することになる。これら「東信系土器」・「深沢系土器」（寺内 2000）と仮称した両者は、長野盆地南部の屋代遺跡群で量的に拮抗しており、上流域（東信地域）と中流域（北信地域）が各々の分布中心地域となる。また、「深沢系土器」は、千曲川を遡るにつれて変容してゆく。第2図8や御代田町・滝沢遺跡（寺内 1997）例のように、継手文が連結し横方向に展開する土器が認められる。中葉Ⅰ期では区画文の影に隠れて目立たなくなるものの、懸垂文の横方向展開への嗜好性は、この段階から潜在的に存在していたと言えよう。

中葉直前期には、これらの装飾が脱落・縮小し、装飾が簡素化する傾向を示す。特に、北信地域に比べ東信地域でその傾向が顕著である（第4図4～6、第5図2）。この時期は、伝統的に踏襲されてきた土器装飾の衰退が進み、新たな装飾の流れが生じる時期である。ここで注目されるのは、関東地域や中部高地南部地域から入ってきた懸垂文の変容形である体部「R」・「h」・「p」字状、およびその反転形の懸垂文の出現である（第3図）。一方、掲載土器の時期はずれるが、新崎式系統の土器から逆「U」字状懸垂文の意匠（第4図7）が、隆線に転換した形で導入される（第4図11）。これにやや遅れて、北信地域に多く見られた継手文が、再度千曲川全域に広がってゆく。

#### 軸となる隆線装飾

これらの体部懸垂文は、その後、融合や変容を重ねながらも、後沖式土器から「焼町土器」を通じて、土器装飾の構図における軸として継承されてゆく（第3図）。例えば川原田遺跡を例にとってみると（第7図）、Ⅱ期には第7図1や5に「h」字および継手文、それらの融合形が見られる。Ⅲ期では第7図25や33に「h」字の変容形があり、32には逆「U」字の変容形、23や24には継手文の変容形が認められる。Ⅳ期にはさらに複雑に変容と融合が進む。39は継手文と「h」字の融合であり、40もその変形である。Ⅴ期では、多くの装飾が衰退し、土器装飾における時代の転換を示している。中葉の土器装飾の終わりを告げる土器51を見ると、最後の継手文の残像を捉えることが可能である。

このように、東信地域の在地土器では、中葉直前からⅠ期にかけて新たに採用し、Ⅰ期に定着した隆線による「R」・「h」・「p」・逆「U」字状文や継手文を、装飾の基軸の一つとするようになる。そして、中葉の全時期を通して変形と融合を重ね、装飾を発達させていったのである。<sup>(4)</sup>もちろん、これに各時期に並行した異系統土器の装飾などを採り入れ、変形や結合した装飾が生じていたことは言うまでもない。

そして、沈線系の装飾は、この基軸となる隆線に沿う形か、空間を充填する形で展開する。

本稿では、焦点を拡散させないためにも、上記の基軸隆線とそれに沿う沈線系装飾を東信地域の土器装飾の基本と考えて、異系統土器や北関東地域の「焼町土器」を見る基準としてゆく。

## ②……………千曲川流域各地の土器様相

前項では、千曲川流域の、特に東信地域を中心に、在地で軸となる土器（後沖式土器・「焼町土器」）の特徴と変遷を述べてきた。ここでは、それらとともに伴出した異系統土器も含め、千曲川流域の土器様相について概観する。説明が長く散漫になるのを避けるため、各地域で代表的な遺跡をピックアップし、さらに遺構をなるべく限定して提示する。ここで言う「在地」とは東信地域（a項では北信地域～信越県境地域）を指すと考えていただきたい。また「搬入」とは、型式的な特徴によって東信地域（a項では北信地域～信越県境地域）以外から運ばれてきた可能性が考えられる土器とする。しかし、型式的な観点だけで「搬入」を確定することはできないため、異系統土器に精通した製作者（地元者および外来者どちらをも含む）による在地生産の可能性も含まれる。

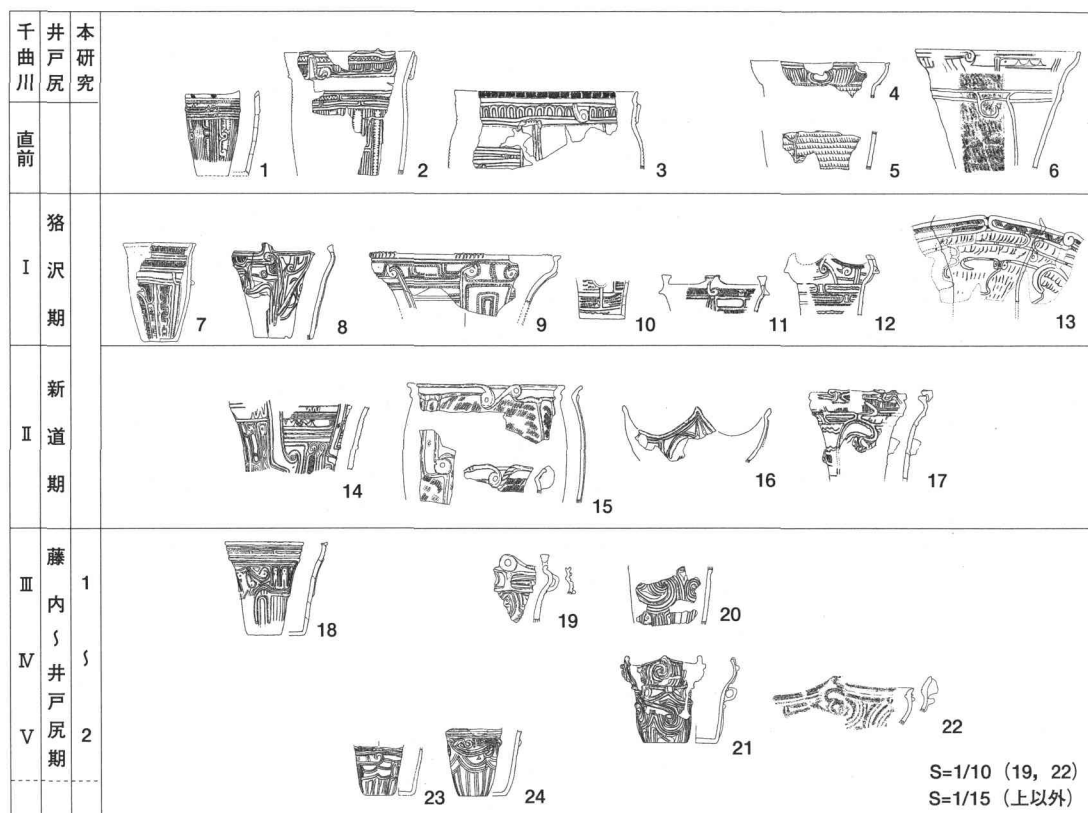
### a. 北信地域 第4図

資料数が少なく全貌がつかみにくい地域である。上赤塩遺跡（三水村）を中心に概観する。

中葉直前段階で、在地の土器（1～3）に加え、指頭圧痕文を地文とする土器が影響を強め、搬入品のほか、在地土器への採用がはじまる（6）。指頭圧痕文の流入は、北関東地域から①東信地域を経由、②新潟県魚沼地域を経由、の2つが主要ルートと想定される。両系統では指頭圧痕文の施文手法に若干の差が認められそうだが、現状では明確な分離はできていない。

Ⅰ期には、東信地域で成立した幅狭楕円形区画文と斜行沈線を装飾の中心とする土器（後沖式土器）の影響を強く受けるようになる（11～13）。搬入品も存在する（未掲載）が、掲載資料11に見られる小「6」字＋逆「U」字懸垂文、12の口縁部の小継手文、13の胎土・色調などの特徴は、北信地域の在地製作であることを示している。継手文と半隆起線を主体とする9、刻み目文で充填する10も在地の土器である。7は北陸系の土器である。これに、勝坂Ⅰ式土器などが少数件う（未掲載）。現状では、明確な阿玉台Ⅰb式土器は見られず、東信地域や魚沼地域で変容を受けた指頭圧痕文が入ってくるに止まっている。隆線による継手文とそれに沿う半隆起線（平行沈線）は、根強く継承される（9）。

Ⅱ期には、各系統の土器の隆線装飾が複雑化し、発達を見せる。縄文施文の復活した土器（15）や大波状口縁などを特徴とする「後田原Ⅳ類土器」（野村1984）（16）が各遺跡で安定的に含まれるようになる。



7. 風呂屋（豊田村） 9・23. 明神前（豊野町） 12. 姥ヶ沢（中野市） 左以外上赤塩（三水村）

第4図 上赤塩遺跡を中心とした北信地域・中期中葉の土器

Ⅲ～Ⅴ期の良好な資料は見つかっていない。灰黄褐色を基調とし、渦巻文を随所に取り入れた20・21・22。あるいは、赤褐色を呈し半隆起線による体部上半部の弧線文と下半部に縦位充填文が施された23・24などが存在する。いずれも、東信地域の「焼町土器」にはほとんど見られない装飾であり、越後地域（さらには北陸地域）との関係を示している。渦巻文の多用、あるいは19・20に見られる挟りによる「玉付き鋸歯文」（蛇体？）などの個別装飾は、新潟県魚沼地域と共通し、群馬県域の土器にも認められる。これらは、東信地域の「焼町土器」には少ない要素であり、魚沼地域を介在して両地域を結びつける資料となろう。

## b. 東信地域1（蓼科山北麓）第5図

千曲川左岸にあたり、東信地域の中では群馬県側からやや遠い位置にあたる。勝坂式土器の影響が濃厚な地域である。長門町・大仁反遺跡、上の段遺跡、望月町・後沖遺跡の資料を掲載した。

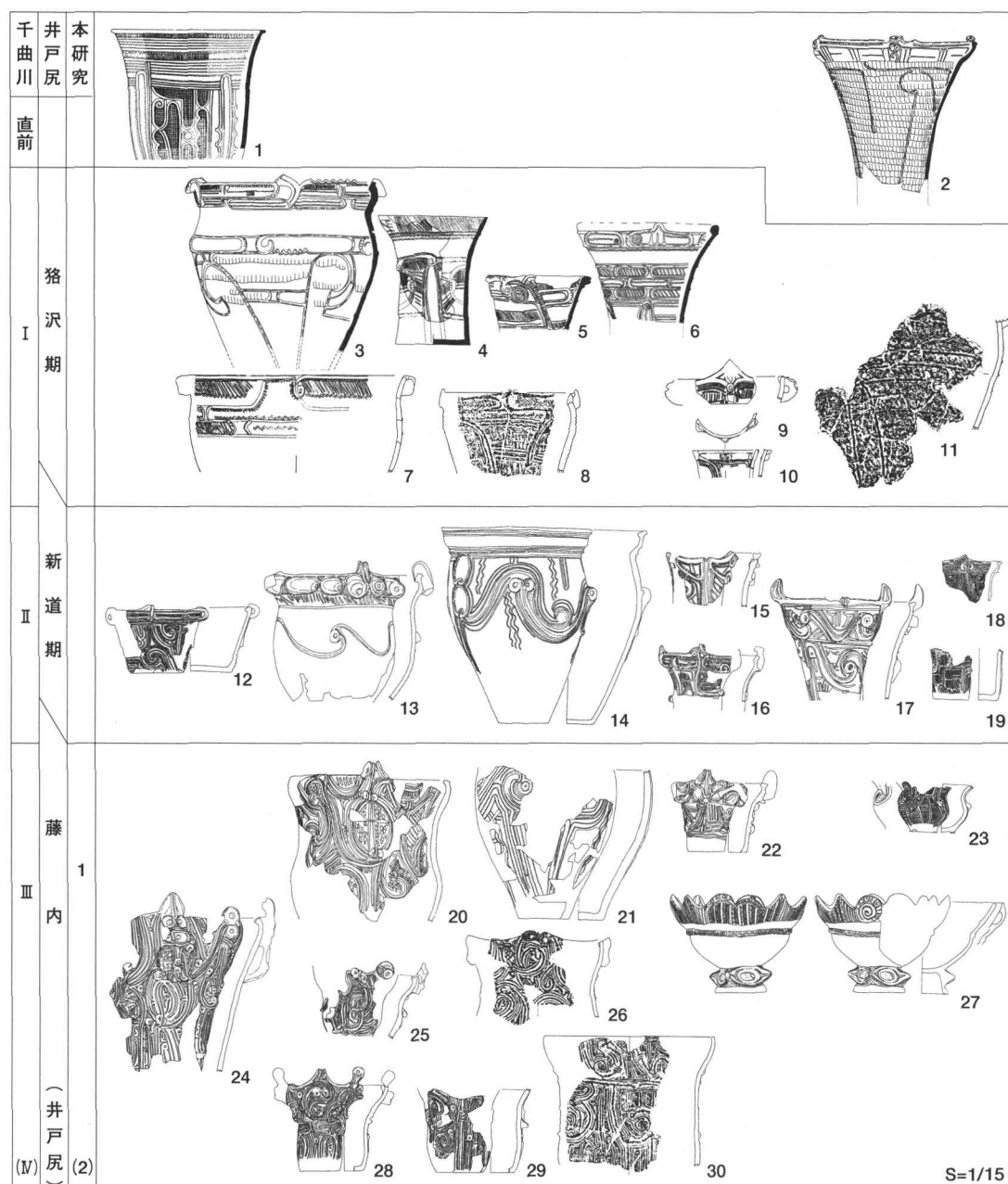
中葉直前段階では、関東地域の影響が強まり指頭圧痕文の使用が増加する。2には中葉の主要な意匠となる反転「R」字状隆線文が認められる。北陸系土器（1）の流入は北信地域に比べ少ない。

I期には、在地製作の後沖式土器（3～8）が組成の中心となり、勝坂式土器（9・10）や阿玉台式土器（11）が加わる。I期後半から勝坂式系統の土器が増加する。

Ⅱ期には、区画文が減少し口頸部の器形や分帯方法には、勝坂式に類似した例（17）が存在する。また、体部の継手文などが横方向に流れる傾向を増す。14には北陸・越後系譜の逆「U」字状文

と関東地域（阿玉台式土器）系譜の懸垂文が融合した二段構成の懸垂文が見られ、さらに横流れとなった継手文が結合する。この他、勝坂式土器の分布圏に近いこともあって、勝坂式の装飾を採り入れた土器が多く認められる（未掲載）。

Ⅲ期には、「焼町土器」を主体として、勝坂式土器の搬入が多く認められる（23・27）。しかし、勝坂式土器からの装飾の採用は前時期ほど明瞭ではなく、逆に「焼町土器」の独自性が強まる傾向



1～6、後沖（望月町） 7～11・26・30、上ノ段（長門町） 12～25・27～29、大仁反（長門町・未発表実測図）

第5図 東信地域（蓼科山北麓）・中期中葉の土器

が認められる。阿玉台式土器をはじめ、群馬県側との交流を示す資料は公表された資料中には皆無である。

Ⅳ・Ⅴ期の資料は、未報告遺跡例に散見される程度である。全体的な流れは川原田遺跡などと同様、Ⅳ期に「焼町土器」が発達し、Ⅴ期には勝坂式が組成の中心となる。

### c. 東信地域2（烏帽子岳西南麓）第6図

鳥居峠、あるいは稜線越えによって、群馬県吾妻郡地域に隣接した地域である。そのため、蓼科山北麓地域に比べ、群馬県域の土器との関係が強く認められる。久保在家遺跡を中心に、東部町の遺跡群から資料を作成した。

Ⅰ期の公表された資料は少ない。釜村田遺跡で後沖式土器の典型的な資料が存在する（1）。関東地域の阿玉台式土器が比較的多く認められる時期である。3は油田遺跡出土の阿玉台Ⅰb式である。装飾の構図にはじまり、結節沈線文や隆線の形状・施文手法は規範に則っており、在地模倣の域を脱している。しかし、図化されていない部分の体部懸垂文が「h」字状となっており、在地の後沖式土器と共通する形状を示している。このことは、阿玉台式土器に精通した製作者が、東信地域が群馬県東部で作った可能性も想定しておく必要がある。

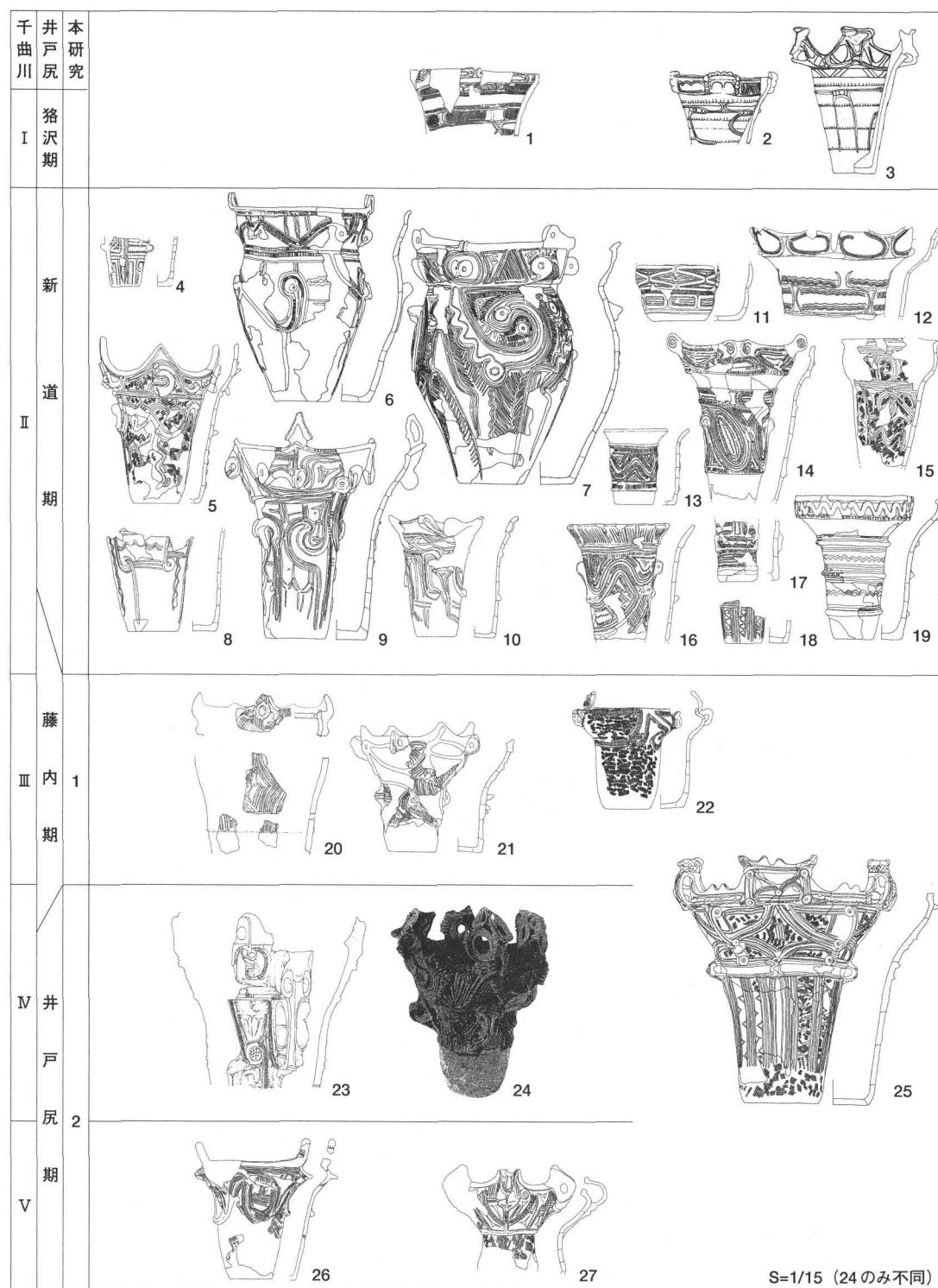
Ⅱ期は久保在家遺跡18号住居址出土土器群で代表させた。組成の中心は、在地の系譜となる（5）・6～10である。前時期から引き続き少量認められる「後田原Ⅳ類土器」（5）にのみ縄文施文が認められる。阿玉台式土器に代わって勝坂式土器とその変容型が多くなってくる。規範に則った11は搬入品と考えられる。13・14は在地製作の可能性も考えられる。16は高い「刻み隆線」、隆線脇の平行沈線、連続爪形文など群馬県域の勝坂式土器の特徴を備えている。搬入品か、群馬県域の装飾に精通した製作者による在地製品と考えられる。17・18もその可能性がある。勝坂式土器以外で群馬県域の製品と見られる例には19がある。また、縄文地文に単沈線だけで装飾を施す15も北関東地域からの搬入品である可能性が高い。この他、搬入品と見られる阿玉台Ⅱ式土器（12）、北陸～越後地域の系譜を引く4が認められる。

Ⅲ～Ⅴ期の資料は、報告例がひじょうに少ない。土器装飾の全体的な変遷は川原田遺跡などと同様と見られる。北関東西部地域との関係を示す資料として25があげられる。長谷川福次氏が「火焰形系」（長谷川2001）とした土器で、長野県側では現在唯一の出土資料である。

### d. 東信地域3（浅間山西南麓）第7図

川原田遺跡の資料を掲載する。この遺跡は、筆者が千曲川流域における時期区分の基準とした遺跡であり、Ⅲ・Ⅳ期の資料が充実している。碓氷峠に比較的近い位置にあり、群馬県碓氷郡地域（新堀東源ヶ原遺跡ほか）を経て、群馬県西毛地域全体との関係が注目される遺跡である。

集落の成立はⅡ期からである。Ⅱ期には、在地製品とみられる4～7、13～16が主体となり、勝坂式系統や阿玉台式系統の土器が伴う。1は口縁部の小継手文、半隆起線区画と連続刻目文の存在から北信地域との関係が深い土器であり、Ⅰ期にさかのぼる可能性もある。また、刻み目のついた高い隆線を貼付する手法（13）は、群馬県域の影響と考えられる。2は前時期の後沖式土器の装飾パターンを色濃く残した土器である。勝坂式系統の土器にはいくつかの系譜が想定され、規範に



1. 釜村田 2・3. 油田 4～19・22・27. 久保在家 20. 伊勢原 21・25・26. 大川 23・24. 真行寺

第6図 東信地域（鳥帽子岳西南麓）・中期中葉の土器

則った縦割区画の土器(17)は搬入品の可能性が高い。8・9は確証はないが在地製かもしれない。隆線脇に半隆起線(平行沈線)と連続刻み目文が配される18、体部に独立した三角形区画文を配し脇に連続刻み目文を施す19は、群馬県域との関係が強うかがえる。ただし、18は器形の特徴からⅢ期に下がる可能性がある。20も群馬県域製の土器と見られる。阿玉台式系統の土器には、規範に則った搬入品と見られる3・11・22が存在する。10・21は阿玉台式的な装飾要素を有しながらも、区画や懸垂文の形に変容の跡が見られる。そのため、他地域で変容したものが持ち込まれたか、在地製作の可能性を考える必要がある。縄文を地文とし半隆起線による規矩文が配される12は、在地の系譜にはなく、北関東地域の土器と見られる。

Ⅲ期には、縄文施文の欠落した「焼町土器」が主体となり、勝坂式系統の土器(35)などが伴う。阿玉台式土器の搬入は現状の資料中では認められない。曲隆線が余り複雑にならず、太めの単沈線が施される24～26は、30～34に比べて古くなると考えられる。23は幅狭の口縁部区画を有し、体部に大柄の鋸歯状文を持つなど、越後地域の土器に類似した資料が存在する。しかし酷似した例はなく、中間地域か東信地域で製作された可能性もある。36は在地には皆無な土器であり、北関東地域からの搬入品と考えられる。

Ⅳ期は「焼町土器」が最も発達する時期である。割付に多様性が進み、曲隆線が複雑化し、突起が巨大化してゆく。一方、勝坂式系統の土器も安定的に認められる。勝坂式土器では、規範に則った44が搬入品と見られる。48もその可能性がある。45～47の勝坂式土器には、装飾に若干の乱れが認められる。確証はないが、勝坂式土器が主体となる地域での製作と見るよりは、在地ないしは群馬県域で製作された可能性が考えられる。

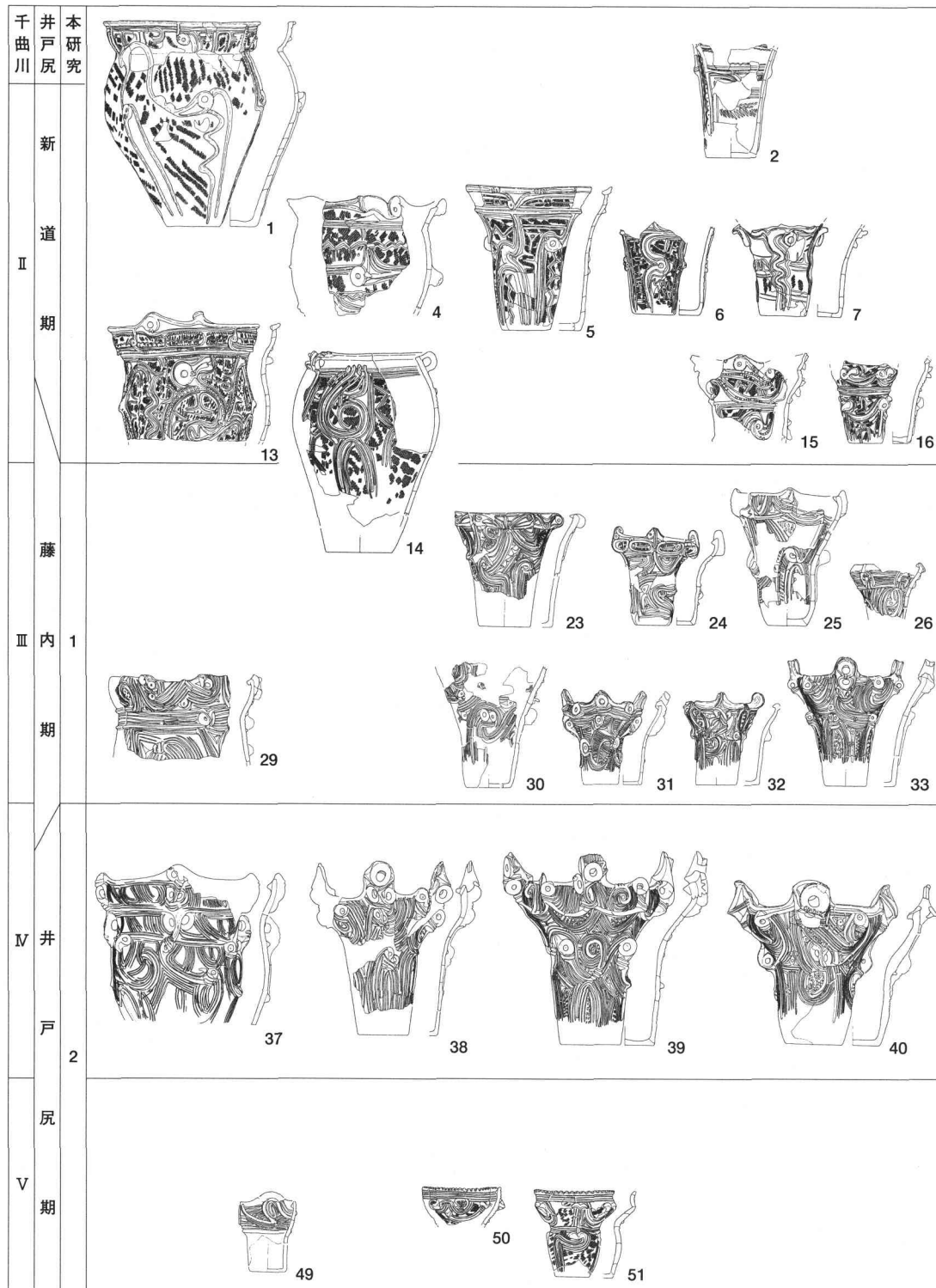
Ⅴ期は、「焼町土器」が急速に衰え、組成の大半を勝坂式系統の土器が占める段階である。「焼町土器」は小型化し、口唇部の刻みや口縁部の横位沈線など、他地域からの新たな装飾要素と組合わせる。また、縄文が施されるなど、本来の「焼町土器」から逸脱する傾向が強まる。勝坂式土器には中部高地南部との関係が強い52・53の他、撚糸文を地文とし横「S」字が連続する関東地域に系譜を持つと思われる54が認められる。

本遺跡は、胎土分析の対象となった土器が数多く存在しており、中間報告に各種分析の結果が掲載されている。本来、分析対象となった個別の破片資料についても、形式的な特徴について記すべきであろう。しかし、本稿は千曲川流域の中期中葉の概要を主題としたため、冗長となるのを避け、個々の資料には言及しなかった。ただし、後述の水沢論文「岩石・鉱物からみた素地土採集領域」では、土器胎土に含まれる混和材から個々の土器の製作地を追い込んでゆく試みを行っており、形式的な特徴との対比を行う必要性が求められた。そのため、筆者の簡単なコメントを水沢論文第3表(P256)中に記した。現在筆者には、勝坂式土器や阿玉台式土器に属する個々の破片資料について、形式的特徴から地域を細かく限定できるだけの力量がない。そのため、大雑把な推定のみを記した。本報告までには精度を高めてゆきたいと考えている。

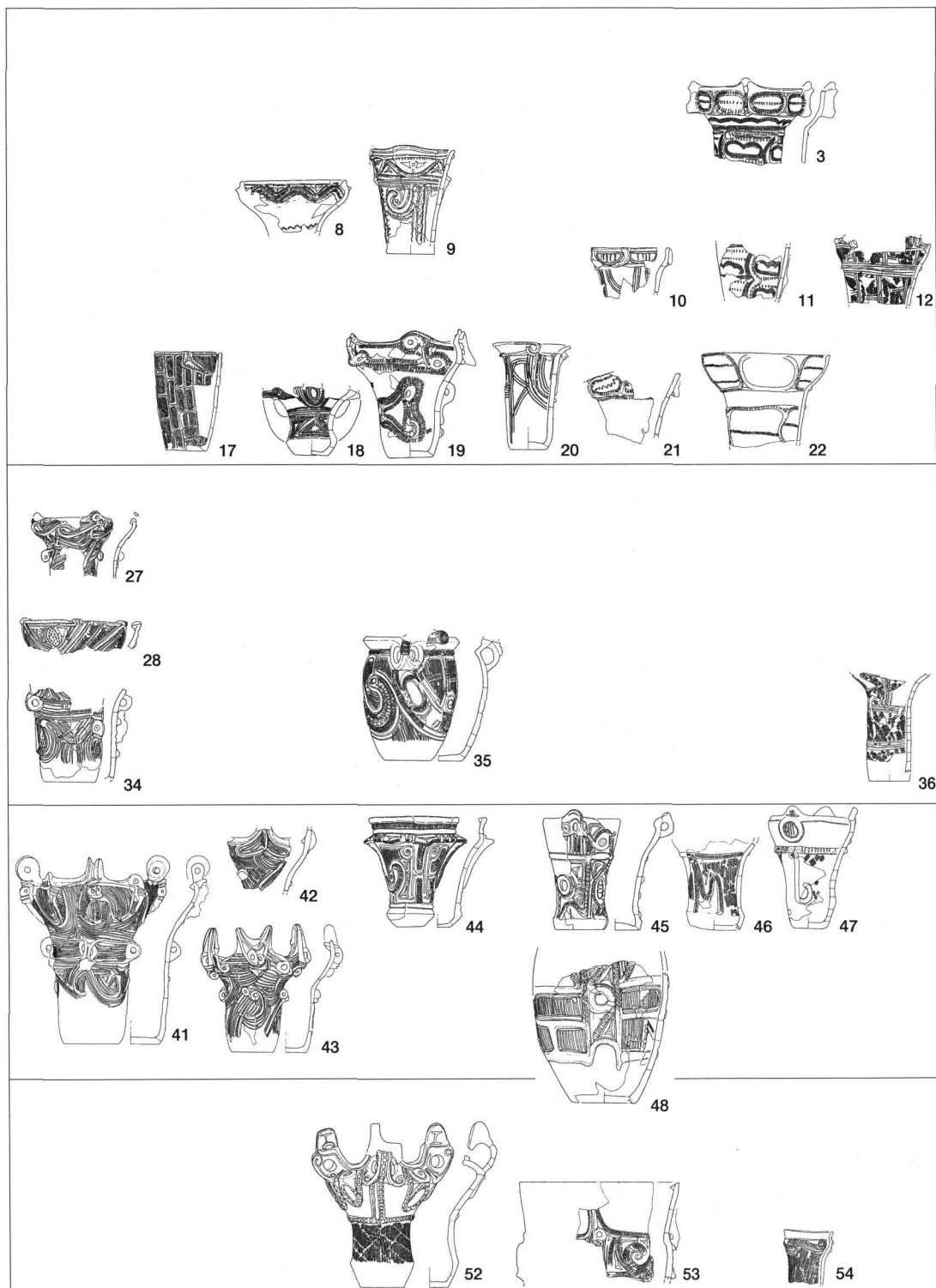
#### e. 東信地域4(荒船山西麓)第8図

寄山遺跡群の資料である。全時期に渡って資料が存在するが、「焼町土器」最盛期のⅣ期の資料が少ない。内山峠に近く群馬県甘楽郡地域(下鎌田遺跡ほか)との関係が注目される。





第7図 東信地域（浅間山西南麓）川原田遺跡・中期中葉の土器



第7図 つづき

I期は後沖式土器（2～4）を中心として、阿玉台Ⅰ式土器（6・7）や、少量の勝坂Ⅰ（貉沢）式土器（5）が伴う。

Ⅱ期には、在地製品と考えられる8～10, 12～15の中にも装飾の多様性が認められる。後沖式土器の系譜を強く残す10, 「後田原Ⅳ類土器」の8・12などがある。在地とした例には、群馬県域の土器との類似点も多く、群馬県域製の可能性も考慮する必要がある。これに勝坂Ⅱ式土器（11・16）、群馬県域からの搬入と見られる17や阿玉台Ⅱ式土器（18）が伴う。

Ⅲ・Ⅳ期には、他遺跡同様「焼町土器」が盛行し、勝坂式土器の伴出例が増加する。一方、阿玉台式土器の搬入は見られなくなる。

V期には、「焼町土器」（32）の衰退が明瞭で、勝坂式系統の土器が主流となる。勝坂式系統の土器には、隆線脇に複列の沈線が沿う33、眼鏡状突起が縦位に連結する34など、「焼町土器」の要素を採り入れた例が認められる。こうした点は、在地製作の勝坂式土器であること示している。規範的な土器である38は搬入品の可能性が高い。

以上、千曲川流域では、東信地域と北信地域で基軸となる土器が異なる可能性が高いこと。また、搬入される土器や影響を受ける地域にも差が認められること、などを明らかにした。

北信地域のⅠ・Ⅱ期においては、東信地域と越後地域からの土器搬入や、装飾への影響が相拮抗していたようである。しかし、その後Ⅲ期以降になると、主に越後地域との関係が濃厚になる。

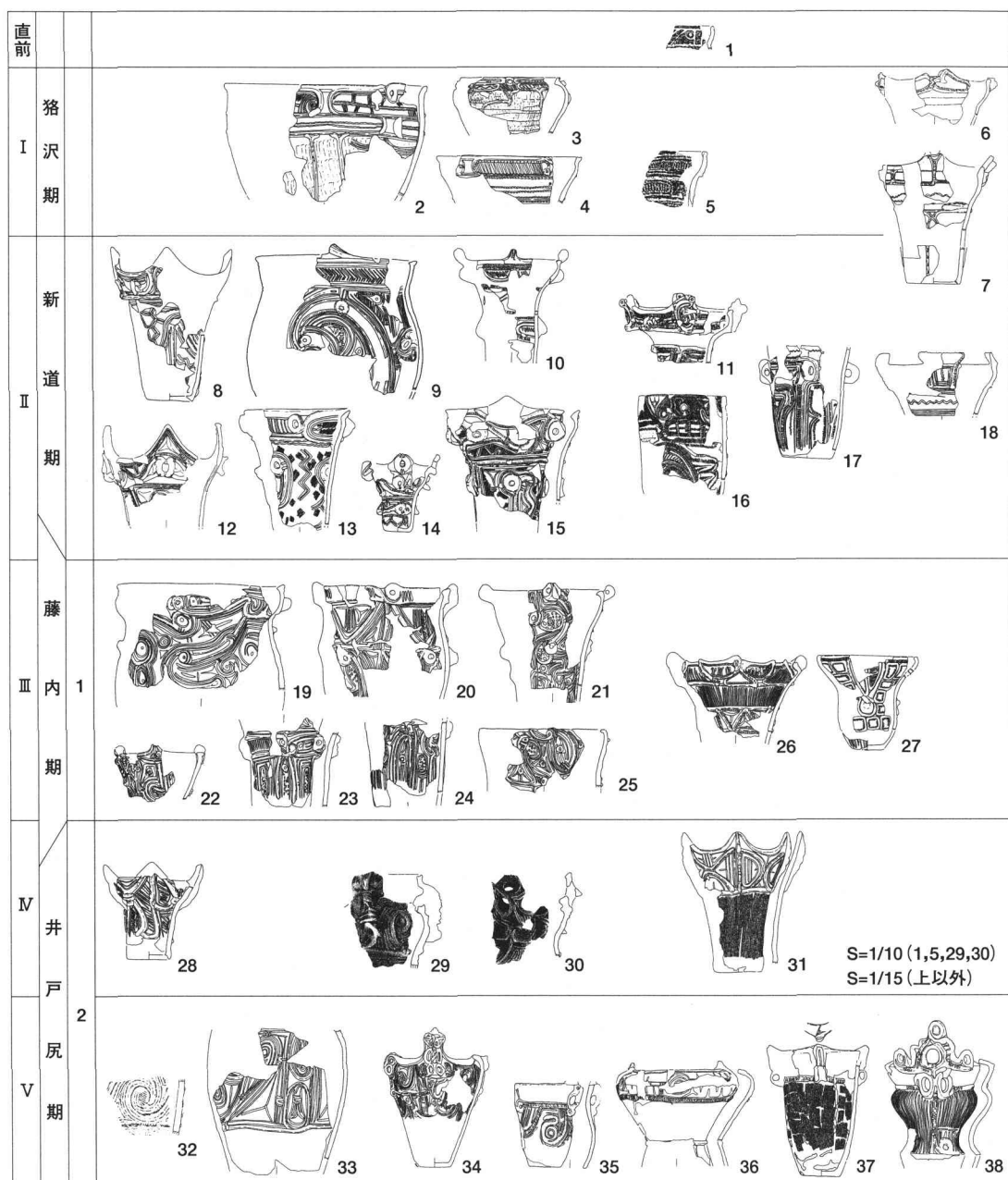
一方、東信地域の様相を見ると、Ⅰ・Ⅱ期には中部高地南部地域の勝坂式土器とともに関東地域の阿玉台式土器の搬入が顕著で、Ⅲ期以降は搬入・在地製問わず勝坂式系譜の土器が多くなってゆく。そして、V期には組成中における「焼町土器」との比率が逆転し、在地製作と思われる勝坂式土器が主体となる。現状では、加曾利Ⅴ式土器成立期に絡んでくるⅣ・Ⅴ期（小林2期）において、北関東地域経由で流入する可能性が想定されるいわゆる「三原田式土器」（赤山1990）や大木式系統の土器はひじょうに少ない。千曲川流域で加曾利Ⅴ式との関係が本格化してくるのは、次の加曾利Ⅴ1式期（小林3期）に入ってからと見られる。

### ③……………「焼町土器」ベルト地帯と地域間交流

ここまでは、千曲川流域の土器様相を概観してきた。次に、この検討結果を踏まえ、東信地域の主体をなす「焼町土器」を基準として、北関東地域における「焼町土器」のあり方について述べることにする。

#### a. 「焼町土器」の分布圏

「焼町土器」最盛期にあたるⅢ期・Ⅳ期（前掲小林論文P 33 小林1期後半～2期前半）の資料に限定して、分布状況を示したのが、第9図である<sup>(5)</sup>。分布の主要な範囲は、長野県東信地域を中心として、西側は中信地域南部（松本・塩尻市付近）から南信地域北部（諏訪湖盆付近）にかけて、東は群馬県の西毛地域から赤城山麓地域である。さらに、その外縁地域に点在している状況がうかがえる。この分布状況は、古東山道に近似した、内陸部の東西ベルト地帯に展開していると見ること



第8図 東信地域（荒船山西麓）・寄山遺跡群・中期中葉の土器

ができよう。概括的に見るならば、この主体的な分布域の南側は勝坂式土器を主体とする地域となり、南東側は阿玉台式土器、南西側は「櫛形文土器」を主体とする地域になると言えよう。そして、北側の新潟県魚沼・頸城地域の山麓地帯から長野県北信地域にかけては、「焼町土器」と異なった未命名土器群が分布している<sup>(6)</sup>。

この分布状況を見る限り、千曲川に沿った南北地域の関係とともに、「焼町土器」ベルト地帯における東西方向の関係が重要であったことがうかがえる。この山麓経由・山越えルートは、古くから、黒曜石をはじめとするモノの流通や人の交流に盛んに利用されていたと考えられる。

## b. 北関東地域の「焼町土器」

では、この「焼町土器」ベルト地帯の東部に位置する群馬県域と、分布の中心部である東信地域では、「焼町土器」にどのような差異が認められるのであろうか。あるいは、すべて東信地域からの搬出と考えられるのであろうか。この点について検討してゆきたい。

第10図は、群馬県域で出土した「焼町土器」と認定される土器（1～3，7～14）と、近縁関係にある土器（4～6）である。

1～8は東信地域のⅢ期に、9～14はⅣ期に対応する土器である。今回、特に東信地域から距離的に離れた赤城山麓地域出土の土器を中心に扱い、東信地域の「焼町土器」と比較してゆくこととする。体系的な検討を行っていないので、特に目についた特徴についてのみ列挙し、今後の検討材料としたい。また、あえて東信地域との差異がほとんど認められない例は除いた。搬入品ではなく、群馬県域で製作された可能性を追求するため、差異の認められた土器のみを提示した。<sup>(7)</sup>

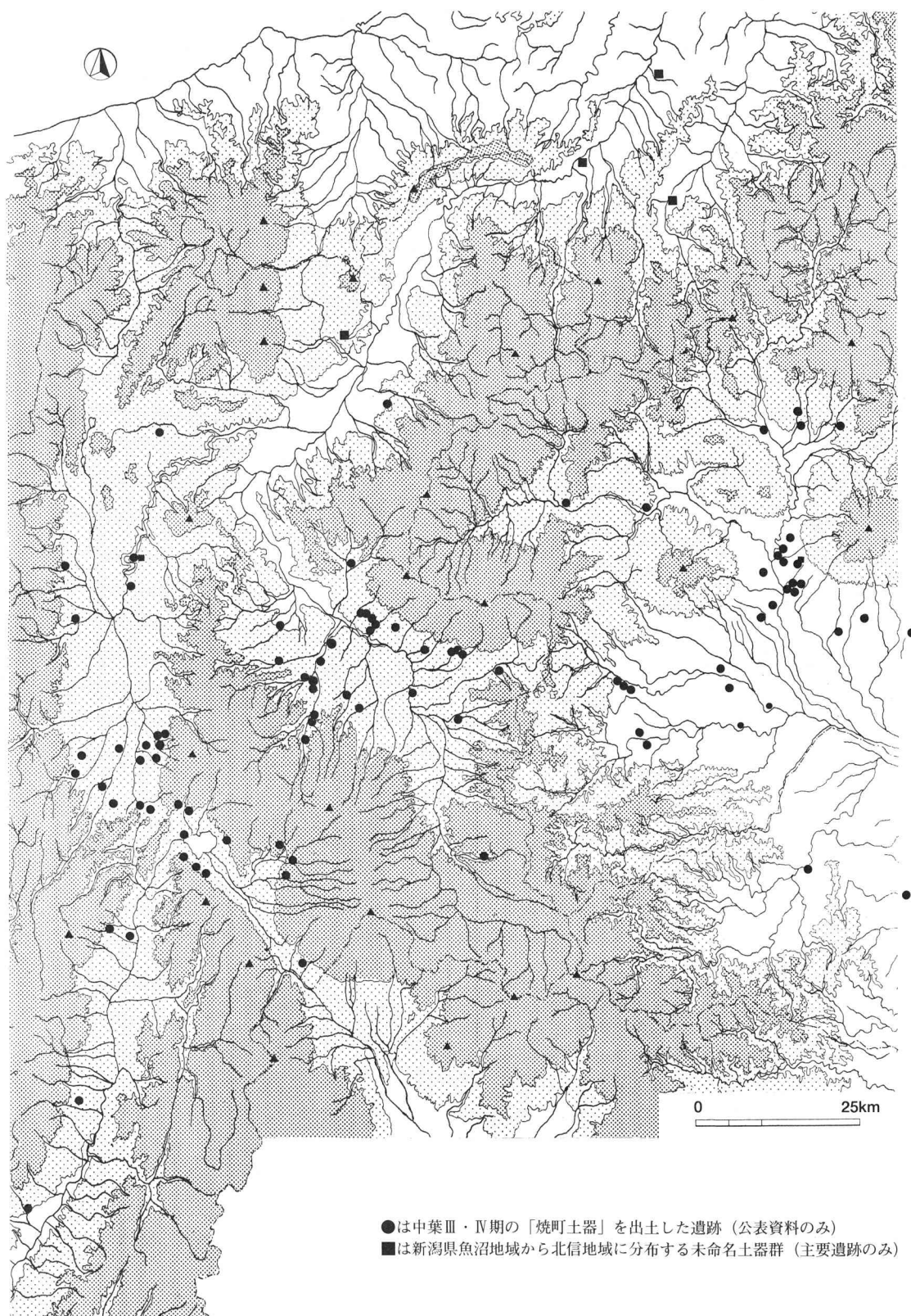
### 器形の特徴

器種については、東信地域と同様、深鉢形が中心である。ただし、東信地域に比べ、赤城山麓地域には大容量の深鉢が製作される場合がある。特徴的な器形の一つには、9・10・12のような体部に膨らみを持たせた例がある。東信地域では、膨らみの度合いが緩いか、まったく張り出さない器形が主流であり、独自色がうかがえる。また、11・14に見られる口縁部が大きく張り出した器形も東信地域にはあまり見られない特徴である。特に11は、東信地域には見られない体部が極端に細い器形である。さらに、大形の突起が口縁部上方に聳え立つ例も、東信地域には皆無である。こうした口縁部文様帯が大きく張り出し、大形突起が付き、体部が細くなる器形は、群馬県域では勝坂式土器（山口1992）や阿玉台式土器の一部にも認められる傾向であり、この地域の嗜好性を示す点であろう。

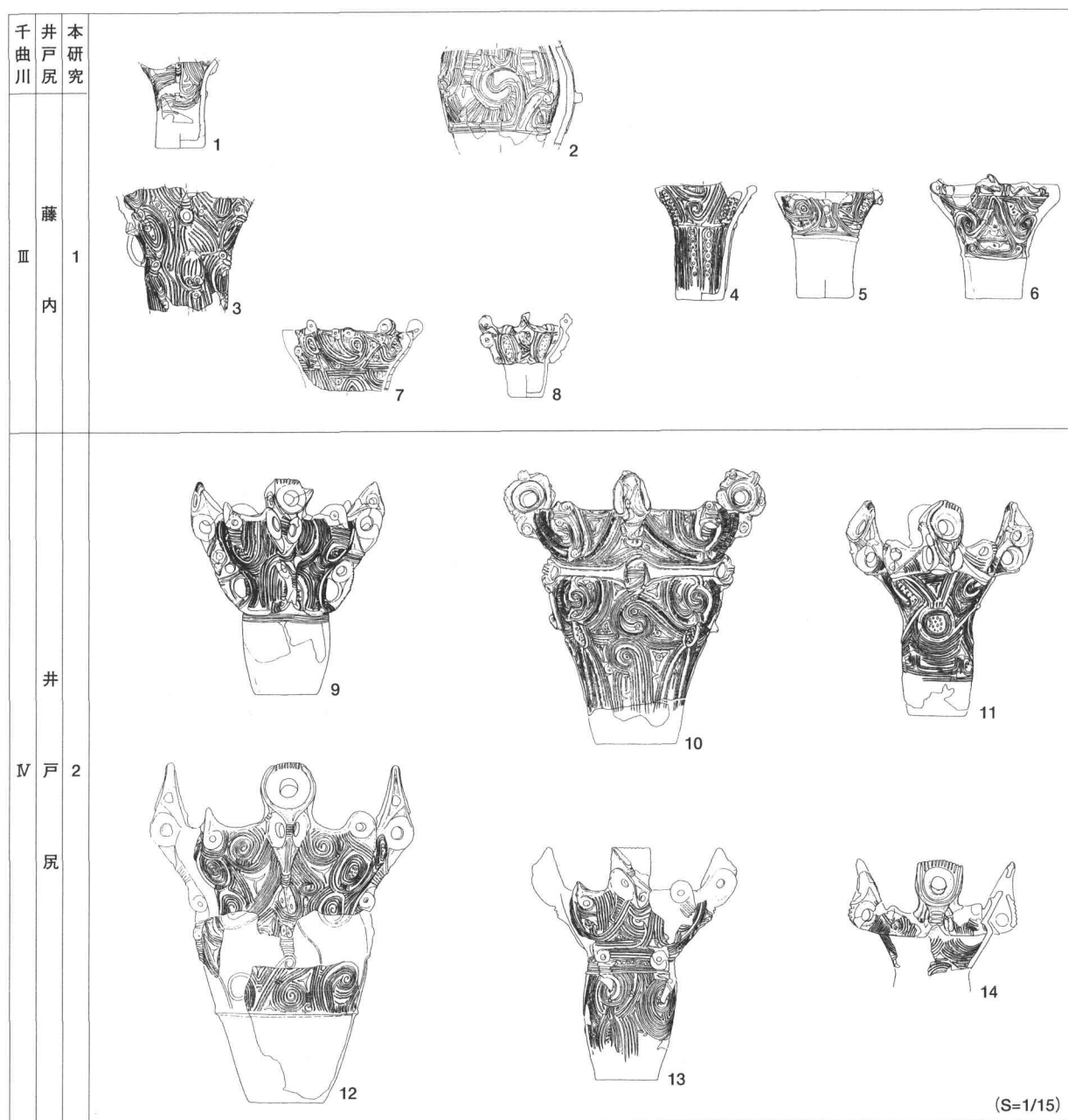
### 基軸となる曲隆線について

基軸となる曲隆線とそれに沿う複列の沈線文は「焼町土器」の指標であり、大きく異なる事例は「焼町土器」から除外してある。しかし、「人体文」の可能性を示された事例（長谷川2001）などは、東信地域に少ない傾向が認められる。

また、「S」字状文など、「焼町土器」とは異なる曲隆線手法や充填装飾を持つ土器が群馬県域には多く認められ、越後地域との関係を示している。この越後地域との関係も、東信地域の「焼町土器」との微妙な違いを生む要因と考えられる。



第9図 「焼町土器」の分布



1～5. 沼南（吉岡町） 6. 房谷戸（北橋村） 7・8. 鼻毛石中山（宮城村） 9・10・13・14  
9・10・13・14. 道訓前（北橋村） 11. 旭久保C（富士見村） 16. 三原田（北橋村）

第10図 群馬県内出土の焼町土器および関連土器



### 個別装飾に関する違い

個別装飾や装飾要素については、細部での相違が認められる。ここでは、その代表的な例を取り上げておきたい。

一つには、群馬県域において渦巻き文を好む傾向がうかがえる点である。12・13に見られる渦巻き文、あるいは11に見られる円形区画の周囲を巡る複列の沈線文は、群馬県域の「焼町土器」を特徴づける個別装飾の一つである。東信地域などでも類似した装飾は存在する。しかし、その場合、連結して流れる隆線文の一部にすぎず（第7図39など）、渦巻き文が主体となる装飾構造にはなっていない。特に、12に見られる渦巻き文の多用は東信地域には存在しない使用例である。

また、3や6に見られる大柄の玉抱き鋸歯状文も、東信地域に比べ群馬県域に目立つ意匠である。ただし、これは越後地域～北信地域に多い個別装飾であり、群馬県域の「焼町土器」を考える上で新潟県魚沼地域からの影響を考慮する必要がある。

13の体部上半に見られる鋸歯文（連続「コ」字文）は、群馬県域の在地土器（いわゆる「三原田式土器」）からの採用である。

### 施文手法における差異

また、群馬県域の第Ⅳ期「焼町土器」に見られる施文手法の特徴として、半截竹管の「ハラ」による半隆起線の多用がある。東信地域の「焼町土器」では、いきなり鋭く深い単沈線を施文するほかに、いったん半截竹管のハラで引いた平行沈線の一条一条を、再びなぞって深い沈線を描出する例がある。これは、赤城山麓地域の「焼町土器」でも確認できる。しかし、赤城山麓地域の例には、この後半の施文手続きが省略される場合が多々観察される。一つには、東信地域では中期中葉を通して半隆起線を施す土器が客体的であったのに対し、群馬県域ではいくつかの類型で半隆起線が使用されてきた伝統（第7図20に類似した類型）が一因しているのかも知れない。もう少し単純に、「焼町土器」の中心地と見られる東信地域の手法が、外縁部に近い群馬県域では「手抜き」されていた可能性もある。さらに、現在、数多く確認されている群馬県域のⅣ期「焼町土器」（第10図）が、東信地域の、例えば川原田遺跡のⅣ期「焼町土器」（第7図37～43）よりも、時期的に若干新しい可能性も考えられよう。地域性なのか微妙な時期差であるのかについては、本報告までに検討しておきたい。

以上、群馬県域（赤城山麓地域）で出土した「焼町土器」には、器形や装飾の各レベルで東信地域との差異が認められた。また、群馬県域の各遺跡から数は少ないものの一定量の「焼町土器」が出土していることから、単発的で特異な存在とは考えられない。こうした点を考え合わせると、東信地域からの搬入品以外に、在地における「焼町土器」の生産が定着していたと考えられる。

### c. 群馬県内の胎土分析（蛍光X線分析）資料について

本稿では、千曲川流域と北関東西部の「焼町土器」に見られる差異について、その概要を記した。しかし、すでに本研究会のメンバーである建石氏が、いくつかの遺跡の報告書において胎土分析成果を公表されているため、該当資料について若干のコメントを加えておきたい。対象は、沼南遺跡

(建石 1996), 鼻毛石中山遺跡(建石 1999), 道訓前遺跡(建石 2001)である。

沼南遺跡は榛名山麓側に位置する遺跡で、赤城山麓地域とは利根川で隔てられている。東信地域により近い地区である。「焼町土器」の規範に準拠している土器は、Ⅲ期に比定される第10図3のみである。搬入品か規範に精通した在地製作者の手になるものであろう。それ以外は、群馬県域で製作された可能性が高いものである。1は粗雑な印象を受けるが、製作者の技量によるのか地域差の問題なのかは保留しておきたい。5は群馬県域に比較的多く見られる横位一次区画線以下を無文にする例である(山口 1999)。陰刻文が明瞭に刻まれ半肉彫りになっている技法は東信地域には見られない。「焼町土器」と異系統土器の融合による独自の土器と考えられる<sup>(8)</sup>。いずれも、Ⅲ期である。また、4では口縁部文様帯に「焼町土器」に似せた装飾を配している。

Ⅲ期あるいはⅡ期に遡る可能性がある例には1がある<sup>(9)</sup>。

鼻毛石中山遺跡では、第10図7・8が「焼町土器」に比定される。いずれもⅢ期においたが確証は得ていない<sup>(10)</sup>。8は小形で、個々の装飾要素などには問題はないが、全体に簡略化されている。7も個別の装飾要素には問題はない。東信地域の資料に比べ、若干玉抱き三叉文の挟りが深い傾向にある。いずれも「焼町土器」の装飾に精通した作者の手によるものと思われる。ただし、装飾の簡略化や微妙な技法の違いが、製作地の違いを表している可能性もあろう。

道訓前遺跡では、前述したとおり第10図9・10・12・14ともに、型式的特徴からは在地製作の可能性が高い。あえて言えば、9が東信地域の例と比較的違和感の少ない資料である。

## おわりに

本稿では、長野県側からの視点によって、主に「焼町土器」について検討を加えた。まず、千曲川流域の縄文中期中葉土器をⅤ期に区分し、その上で、在地で基軸となる装飾が、懸垂文から発展した曲隆線文であることを示した。また、各時期に北関東地域から搬入されたり、影響を受けた土器について述べた。今回は触れられなかったが、東信地域内においても「焼町土器」には胎土・色調、質感などに差が認められており、各小地域毎に主体となる「土」がありそうである。一方で、そうした「土」の異なる「焼町土器」が各地域に混在している事実もある。この点は、小地域毎における土器製作のあり方、そして流通・人の移動を解明するための材料となるであろう。土器胎土の分析と共同で研究を進める必要性がここにある。

後半では、「焼町土器」の分布から「焼町土器」ベルト地帯の存在を明らかにし、千曲川を介した交流とともに、峠や稜線越えルートによる交流が盛んであった可能性を示した。「焼町土器」の搬出・搬入が考えられる一方、東信地域と赤城山麓地域の「焼町土器」の間には、多くの差異が認められる例が存在していた。このことは、「焼町土器」の製作が、各々の地域で独自に行われていたことを示している。遠く離れた地域間で、類似した土器が製作されていた状況の解明が必要となってこよう。また、赤城山麓地域に広がる集落内では組成のごく一部でしかない「焼町土器」を、継続的に作っていた製作者はどういう人たちなのか、等々課題は多く残されている。

本稿を書くにあたって、多くの方々のご協力をいただいた。資料を所蔵している各教育委員会・資料館関係者の各位、長谷川福次氏。未発表実測図の掲載を承諾していただいた長門町教育委員会の大竹幸恵氏。さらに、執筆の機会を与えてくださった西本豊弘先生をはじめ、数々の助言をくださった当研究会の諸氏に感謝の意を表したい。

追記) 脱稿後、本稿において手薄であった北信地域の土器群について分析を進めており、2003年には「山屋敷Ⅰ遺跡出土土器に見る中部高地地域・関東地方との交流関係」『上越市史』資料編2 考古、「後田原遺跡第Ⅳ類土器の系譜」『下総考古学』17号、「栄村・長瀬新田遺跡出土の縄文土器(1)」『長野県考古学会誌』103・104のレポートを公表した。北信地域の様相を補完する意味で参照していただければ幸いである。

## 註

(1)—— 縄文時代中期中葉の「曲隆線文」とは、粘土紐の貼付け手法による装飾のうち、器面を曲線的に展開してゆく隆線装飾をさす。そして多くの場合、複列の沈線文がこの隆線に沿うのを特徴としている。この「曲隆線文」が、装飾を構成する上での基本軸となっている土器を「曲隆線文」系土器群と仮称したい。この定義に合致する土器は、北陸地域の上山田・天神山式、越後地域の末命名土器群や火焔型・王冠型土器、千曲川流域を中心とした「焼町土器」など、中部高地の分水嶺以北から日本海沿岸地域に分布している。この点は、隆線による分割や区画を優先し、その内部に曲隆線状の装飾を組み込んでゆく分水嶺以南の勝坂式土器などとは大きく異なる点である。このことは、「焼町土器」の系譜を考える上で重要となろう。

(2)—— 同一河川である千曲川と信濃川は、長野県と新潟県で呼称が変わる。ここでは、上流から千曲川上流域→千曲川中流域→千曲川下流域とし、県境の狭小部から信濃川上流域と区分する。

(3)—— 長門町の分布調査によると、大門川の谷奥部まで中期の集落遺跡が存在している。さらに、高原地帯においても土器の散布が認められる(長門町教育委員会1999)。この状況は、茅野市側でも確認することができる(茅野市1986)。黒曜石原産地という特殊事情もあるが、この他にも狩猟採集や交易のため、高原地帯は頻繁に縄文人が訪れる場所であったと推測される。こうした状況は、碓氷峠付近にも当てはまる可能性が高い。しかし、浅間山麓では度重なる火砕流や降灰の堆積によって遺跡の発見が困難になっている。

(4)—— 千曲川上流域を中心とした縄文時代中期中葉

の土器を、体部懸垂(隆線)文の定着から曲隆線文への発達・衰退でまとめた。一方、今回の主題からは離れるが、中葉Ⅰ期に比定される後沖式土器とⅡ期以降の「焼町土器」を区分した根拠について説明しておく必要がある。それは主として以下の理由による。後沖式土器の装飾構造は、横位区画文と体部懸垂文の組合せから成り立っている。中葉Ⅰ期においては、隆線による装飾が発達する中で、曲隆線(懸垂文)よりも区画文に重点が置かれている。最も盛んとなる段階では、口縁部から体部にかけて横位区画文が展開する。これに対し、中葉Ⅱ期には区画文が崩れ、これに変わって体部の曲隆線文が発達し、装飾の中心的な存在へと浮上する。中葉Ⅲ期には、区画をいっさい持たず、口縁部上端から体部下半まで連なる曲隆線文が装飾の基軸となる土器が存在する。このように曲隆線文を基軸として装飾が変化してゆく諸段階を「焼町土器」の時期としている。後沖式土器から「焼町土器」の諸段階は基本的には同一の系統と捉え、その上で、各段階毎に独自の変化と他地域からの影響の強弱によって変化が生じている、という考え方をとる(寺内1996, 1997)。よって、山口逸弘氏の言う、筆者の中葉Ⅱ期を阿玉台式土器との関係が強い「新巻類型」とし、中葉Ⅲ期以降を勝坂式土器との関係が強い「焼町類型」とする考え方(山口1992)とは異なる。また、後沖式土器を勝坂式土器や阿玉台式土器から分離した根拠については寺内1996を参照していただきたい。

(5)—— 「焼町土器」の分布状況については、野村1984、堤1997、長谷川2001などで示されている。その内、中葉Ⅲ期・Ⅳ期に時期を限定し、さらにいくつかの遺跡を追加して作成した。ただし、新潟県・五丁歩遺跡

で高橋氏が隆Ⅰ～Ⅴ系列とされた土器の一部をⅢ・Ⅳ期「焼町土器」とすると、若干分布状況が異なってくる。しかし、器形や口縁部区画の相違、曲隆線文の意匠の相違、隆線間の充填装飾の相違が認められる点から、「焼町土器」に含めるとしても地域色のひじょうに強い一群となる。よってとりあえず、今回の分布図からは除外した。

(6) — 五丁歩遺跡で高橋氏が隆Ⅰ～Ⅴ系列とされた土器のうち、「焼町土器」(主にⅡ期のもの)を除外した土器が大半を占める。そのため、全てが同一型式・類型に属するわけではない。とりあえず、東信地域の「焼町土器」とも異なるし、上山田・天神山式とも異なる土器群を第9図中では一括して■で示した。詳細に見れば、東信地域や群馬県域にも、こうした土器は存在するが、ここでは代表的な遺跡のみを示した。今後、資料が増加ししだい、どこまでを「焼町土器」に含めるか、といった分類上の問題とともに、検討しなくてはならないと考えている。

(7) — 群馬県域出土の「焼町土器」の特徴については、山口逸弘・長谷川福次両氏からもご教示を得た。

(8) — 「焼町土器」の範疇を巡って問題となる土器群である。「焼町土器」に含め(山口1999)、その中で地域性と捉えるか。あるいは本稿のようにいったん「焼町土器」から除外し、類縁関係にある土器とするか。本報告までに再度検討を加えてゆきたい。

(9) — 研究会メンバーで位置付けに議論のあった土器である。舌状の「し」字隆線+逆「U」字隆線、さら

に二条の継ぎ手隆線がセットになるパターン、あるいは単体でゆがみのない「8」字突起、さらには太めの単沈線の存在は、「焼町土器」古段階(寺内1997)の特徴である。ただし、これは報告書掲載図とは天地を逆に見た場合である。その場合頸部が無文帯になることとなり、類例が乏しく若干の問題が残る。単沈線の施文が粗雑で深度がⅡ期の例に比べ若干深いようであり、ここではⅢ期の古い段階に位置づけておく。装飾の構図、手法から勝坂式とは考えにくく、「焼町土器」の搬入品、もしくは規範に則した在地製品であろう。

(10) — 8に認められる口縁部から体部にかけて、直線的に下がる把手(突起)の存在は、長野県側の資料ではⅣ期以降が中心である。さらに、把手部の捻りを加えた粘土紐の貼付は、さらに後出の傾向が強く、中期後葉の土器にまで続く要素である。しかし、本例は、土坑の一括出土資料として、古く位置付けられる土器と伴出している。群馬県域「焼町土器」の変化が千曲川流域と異なっているのか、伴出した他の土器の位置づけが新しくなるのか、あるいは製作されてから土坑内に廃棄されるまでの時間が、各個体で異なっていたのか、検討が必要となる資料である。7は突起が大きく発達することなく、横位に展開する曲隆線文もさほど複雑化していないため、Ⅲ期の新しい段階と考えた。しかし、曲隆線に沿う沈線は半截竹管のハラを利用した半隆起線である。この点は、千曲川流域に比べ、群馬県域での「焼町土器」への半隆起線出現期が多少早くなる可能性がある。

## 引用・参考文献

- 赤山容造 1990 「中期前半期の土器」『三原田遺跡』  
小林眞寿 1996 「浅間山麓の縄文中期中葉土器論 焼町土器の研究」『長野県考古学会誌』80  
高橋 保 1992 「土器について」『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』  
建石 徹 1996 「縄文時代中期における土器の移動に関する基礎的研究」『土曜考古』20  
建石 徹 1999 「沼南遺跡出土縄文土器の胎土分析」『沼南遺跡』  
建石 徹 2001 「道訓前遺跡出土土器の胎土分析」『道訓前遺跡』  
茅野市 1986 『茅野市史 上巻 原始古代』  
堤 隆 1997 「浅間山麓における縄文社会復元に向けて—塩野西遺跡群の調査成果からの素描」『川原田遺跡』  
寺内隆夫 1988 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1  
寺内隆夫 1992 「浅間山東側からの視線、西側からの視線—焼町土器の成立をどうとらえるか—」『長野県考古学会誌』67  
寺内隆夫 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』Ⅰ  
寺内隆夫 1997 「川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について」『川原田遺跡』  
寺内隆夫 2000 「中期前葉の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 24 一更埴市内その3—更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)—縄文時代編—』  
寺内隆夫 2001 「勝坂式土器と後沖式土器の認識、および「井戸尻編年」に関連して—「縄文時代」10号掲載の三上徹也氏の論文に答える—」『長野県考古学会誌』97  
寺内隆夫 2002 「後沖式土器への系譜—千曲川流域における中期中葉(初頭)、斜行沈線文系の土器について—」『長野県の考古学』Ⅱ

- 
- 野村一寿 1984 「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例の位置づけ」『中部高地の考古学』Ⅲ  
 長門町教育委員会 1999 「県営土地改良総合整備事業 大門地区に伴う発掘調査報告書Ⅰー本沢口・高岩・北谷戸・東沢・戸陰沢・名呉地区ー」  
 長谷川福次 2001 「火焰形系土器について」『道訓前遺跡』  
 長谷川福次 2001 「道訓前遺跡の焼町土器」『道訓前遺跡』  
 山口逸弘 1991 「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成ー群馬県の縄文時代中期中葉の二者ー」『土曜考古』16  
 山口逸弘 1992 「新道系土器群の変容過程ー利根川上流域を中心としてー」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』9  
 山口逸弘 1997 「川原田遺跡「新巻類型」と「焼町類型」ー両類型をとりまく型式組成からー」『川原田遺跡』  
 山口逸弘 1999 「沼南遺跡縄文時代中期中葉末の土器様相」『沼南遺跡』
- 

### 図版掲載土器引用文献

- 
- 大田区立郷土博物館 1995 「火焰型土器」  
 北橋村教育委員会 2001 『道訓前遺跡』  
 群馬県教育委員会ほか 1990 「三原田遺跡」  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1992 「房谷戸遺跡Ⅰ」  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1999 「沼南遺跡」  
 佐久市教育委員会 1995 「寄山」  
 笹沢 浩 2001 「明神前遺跡」『豊野町誌』  
 三水村教育委員会 1997 「上赤塩遺跡」  
 寺内隆夫 1991 「長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62 合併号  
 東部町教育委員会 1982 「真行寺遺跡」  
 東部町教育委員会 1993 「釜村田遺跡」  
 東部町教育委員会 1992 「大川遺跡」  
 東部町教育委員会 1990 「東部町誌」  
 東部町教育委員会 1994 「久保在家遺跡」  
 長門町教育委員会 1986 「大仁反遺跡」  
 長野県埋蔵文化財センター 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24ー更埴市内その3ー更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）ー縄文時代編ー」  
 中野市教育委員会 1984 「姥ヶ沢遺跡」  
 西沢隆治 1990 「深沢遺跡」『長野県史 考古資料編』全1巻2  
 林 かずお 1976 「東部町祿津油田遺跡出土の縄文中期土器」『長野県考古学会誌』23・24 合併号  
 丸子町教育委員会 1990 「下久根・二反田遺跡」  
 森嶋稔・児玉卓文・大竹幸恵 1989 「新編長門町誌」  
 宮城村教育委員会 1996 「鼻毛石中山遺跡」  
 御代田町教育委員会 1997 「川原田遺跡」  
 望月町教育委員会 1983 「後沖遺跡」  
 望月町教育委員会 1990 「上吹上遺跡」

寺内隆夫（財団法人 長野県埋蔵文化財センター）

## **Study of Pottery from the Middle Stage of the Middle Jomon Period in Area of Chikuma River Basin**

TERAUCHI Takao

This paper investigates production and distribution of the pottery from Northern Kanto region in the middle stage of the Middle Jomon Period using materials from Chikuma River Basin, Nagano Prefecture.

First, the Yakemachi-type pottery, which is the main type of pottery in Chikuma River Basin during the middle stage of the Middle Jomon Period, was classified into five phases based on pottery decoration. Next, the regional differences within the Chikuma River Basin in each of the phases were examined. Then, the trend was compared with the patterns in Northern Kanto region.

The result of the analysis suggests that there was a temporal and regional difference in the pottery style from Chikuma River Basin, and these differences were caused of by degree of influence and introduction of products from other regions such as Northern Kanto and Southern Chubu.

Yakemachi-type potteries were distributed in Gunma Prefecture, but those types had different features from the original type.